

東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター主催客員教員連続講演会（第4回）

「台湾社会と教師——職業イメージと期待をめぐって」記録集

日時：2017年6月30日（金）午後1時～3時

場所：東京学芸大学小金井キャンパス 芸術・スポーツ科学系研究棟2号館第1会議室

講師：黄 柏叡

（東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター客員准教授／中国文化大学
副教授）

コメンテーター：山田 浩之（広島大学大学院教育学研究科教授）

通訳：臧 俐（東海大学短期大学部准教授）

司会・編集：上杉 嘉見（東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター准教授）

【講演】

台湾社会と教師——人々が抱くイメージと期待

黄 柏叡

山田先生をはじめご来席の皆さん、こんにちは。私は台湾の中国文化大学から参りました黄柏叡です。今日私が報告するテーマは「台湾社会と教師」ですが、その中で特に人々が抱くイメージと期待についてお話をします。

4月の末頃に上杉先生から、台湾の教師の社会的地位や社会的役割についてご講演いただけないでしょうか、というご依頼をいただきました。今日は、社会学の観点から、台湾社会における教師の地位と役割についてお話をしたいと思います。

本日の報告は5つの部分に分かれます。第1に、社会的地位と役割という社会学の概念をご説明します。第2と第3の部分では、台湾での教師の地位と役割についての研究の状況をご報告します。これらの研究は台湾では40年の歴史があります。第4部では、台湾の教師が置かれている矛盾と衝突、つまりジレンマの状況についてご紹介します。第5の部分はまとめとなります。

教師の社会的地位と役割

地位と役割というのは社会学の中ではとても大切な概念です。地位は個人の権力と責任の総称だと思います。そして役割は、地位に関連する社会的属性と社会的期待を指すと思います。地位は役割に比べて、静態的な部分に相当します。役割は逆に地位と比べると動的な側面に当たると私は思います。

地位の概念は2つに分類することができます。まず第1は生まれつきの地位です。もう1つは後天的に獲得する地位という概念です。例えば生まれつきの地位は、生まれてから自然にそういう地位に就いてしまうという部分を指します。階級がこれに相当します。そして後

天的に獲得した地位は、学習や努力をして手に入れた地位だと言われています。ですから、教師という職業はほとんど後天的な地位だと認識されています。

先ほど申し上げました生まれつきの地位であれ、後天的に獲得した地位であれ、社会学の中ではこれらを2つの方法で考察します。1つは、客観的な要素から地位を考察する方法です。それは、個人の教育レベル、職業の種類、あるいは経済収入、住居状況などから判断されます。もう1つは、社会の構成員を対象にある職種の信望について調査するという方法です。

引き続き、教師の役割についてですが、私はこういうふうに認識しております。教師というのはとても特殊な身分と地位にあるものですので、世の中の様々な変化、つまり教師が直面する状況が変わることでその役割も変化しますが、(教師の役割は)教師に特別に期待されるもの、あるいは実際に教師が果たした役割と行動を指すものと考えられます。

教師の役割に影響を与える要素はいろいろあります。例えば、社会文化、学校組織、教育歴、社会変動など——そういうものも含めまして様々な要素が教師の役割を変化させています。

教師の社会的地位

それでは第2の部分に入ります。ここでは台湾社会の教師の地位についての研究を、3つに分けてご紹介します。まず教師の出身背景、そして教師の職業的信望、最後に変わりつつある教師の社会的地位についてです。

まずは教師の出身背景についてです。4点の研究をご紹介します。

1点目は、葉国安氏による師範生を調査対象として行った1979年の研究です。この研究でわかったことの1つは、師範専科学校生の出身家庭の社会的地位・経済的地位は、普通の高校生の家庭背景のそれよりはるかに低いということです。

少しだけこの背景をご紹介します。師範専科学校生とは、主に小学校の教員になる学生です。師範専科学校には中学校を経て入学します。これは高校教育に相当する段階なのです。1979年の台湾では、師範専科学校に入学できれば安泰でした。卒業後の教員就職が政府によって保証されていたからです。ですから70年代は、多くの経済的な状況があまり良くない家庭の子どもたちは、師範専科学校に入学を希望しました。卒業してすぐに安定した職業が得られるのです。ですから、同じ高校教育の段階にある生徒でも、師範専科学校生は一般の高校生より出身家庭の地位が低かったということです。この研究から、当時の台湾の社会をうかがい知ることができます。

このほか葉国安氏は、師範専科学校生の中でも、女子のほうが男子より出身家庭の社会的地位は高いことも明らかにしました。当時の台湾社会では、女子は高い社会的地位を得なくても良いという考え方がまだありました。当時の台湾では、女子は教員になることができれば相当良い仕事を得た、と考えられていましたので、多くの女子生徒が師範専科学校に入学しました。出身家庭はある程度豊かで、親は自分の娘を教員にするのは当然だと考えていました。

2点目の研究は1983年の楊瑩氏の研究です。研究対象は師範大学および師範学院の学生です。師範大学と師範学院の学生は卒業後、中等教育段階の教員になります。そこで、この研究は、師範大学・師範学院生と一般大学の学生との比較を中心としました。その結果は、

葉国安氏の研究と同様に、一般大学の学生より師範大学・師範学院生のほうが出身家庭の社会的地位は低く、収入も少ないというものでした。

3点目の研究は1997年の郭丁熒氏の研究です。この研究は、前の2つの研究とほぼ同じ結論を得ていますが、独自なのは教科の専攻によってもまた差が出てくるということです。例えば、音楽系の学生は社会科系の学生より地位が高いことが明らかにされています。

4点目の符碧真氏による1999年の研究もこれまでのものと似ていますが、教師の出身家庭の社会的地位のほとんどは中あるいは下くらいだということ、女性教員は男性教員より高いこと、そして中等教員は初等教員より高いという結果が得られました。

次は教師の職業的信望についてです。

林清江氏の研究は1971年、81年、92年と約20年にわたって行われたものです。これは初等教員の職業的信望についての研究でした。その結果は、初等教員の職業的信望は中の上ぐらいのレベルにあり、20年の間、大きな変化がなかったというものでした。

別の研究からもおおむね同じ結論を得ることができています。1975年の陳奎熹氏の研究からは、初等教員の職業的順位は中から上ぐらいにあるということが明らかにされましたが、郭丁熒氏の1995年の研究でも同様の結果が出ました。

20世紀末になりますと、マルクス主義あるいは左派の研究者の影響を受けまして、一部の教育学者は左派の視点から教員の階級などを研究し始めました。当時の台湾社会は、ちょうど大きな教育改革の時期にありました。政府に対し教育への統制を緩和してほしいという要求が強まり、多くの大学教授、初等・中等教員、さらに一般市民も街に出てデモを行い、政府に抗議しました。一部の教員は労働組合をつくり、政府あるいは学校当局に対して自分たちの権利を主張するようになりました。

2人の教育学者がこのような状況を対象に研究を行いました。伝統的に教師の役割と地位はとても高いのですが、こうした状況を経ると教師の役割あるいは地位は低くなるのではないかと、ということを中心に考察しました。

2009年の林俊瑩氏の研究によれば、教師自身は、自分は中産階級に属し、労働階級ではないというふうに考えていたといいます。また、姜添輝氏の2008年の研究でも、教師は自らを専門的な職業と認識し、労働階級に属するわけではないと考えていたことが明らかにされました。

最後は変化しつつある教師の社会的地位についてです。この研究は、20世紀末の教育改革を経て次のようなことを明らかにしました。教師のあるべき地位をめぐる社会の見方が変わったということです。つまり、社会は教師の仕事を軽く見るようになり、教師は専門的な職業というほどではないと考えるようになりました。

教師の役割の変化

教師の役割の研究について、2つに分けてお話いたします。まず教師の役割の変化について、もう1つは教師が役割の変化の中に置かれるジレンマについてです。

はじめに教師の役割の変化についてですが、これには20世紀末の政治体制の変化という大きな背景がありました。社会の雰囲気は権威が強調された時代の保守主義から民主主義、自由主義あるいは多元的、開放的なものになりました。こうした社会の雰囲気は、教師の役割に大きな影響を与えました。

郭丁熒氏は、次の6点から教師の役割の変化を見ています。すなわち、「教えること」「職業倫理」「特性」「地位および権威」「専門的自律性および職能開発」「コミュニケーション」です。

この研究が明らかにしたのは、「教えること」「特性」「専門的自律性および職能開発」「コミュニケーション」という4つの役割がますます強調されるようになったということです。他方、教師の「職業倫理」と「地位および権威」の2つは弱くなりました。その結果、教師の社会的地位はますます低くなるということがわかります。

多くの教師にとってプレッシャーやストレスはますます大きくなり、教え子たちはますます複雑になり指導しにくくなっていると感じるようになりました。

次に役割変化の中にある教師のジレンマについてです。20世紀末の教育改革は、台湾の教師にカリキュラム開発と改善の権限を与えました。教師の役割は、知識の伝達者からカリキュラム開発者へと変わりました。

このような現象について3人の学者が次のような研究を行いました。陳伯璋氏は、教師はカリキュラム改革の推進者でなければならないと言いました。饒見維氏は、教師の役割を先導的な研究者として指摘しました。林佩璇氏は、教師は役割が変化するプロセスの中でジレンマに置かれているということを指摘しました。

台湾における教師の地位と役割のあいだの矛盾と衝突

続きまして、20世紀の改革後の教師の役割・地位の矛盾と衝突についてお話しします。教師の理念と価値観について、2つの側面から見てまいります。まずは全体論と断片主義の衝突から、次に「教師の道を伝え、業を授ける」という伝統的な役割と今の社会的職業の間の衝突・矛盾から見てまいります。

まずは全体論についてお話しします。儒教における教師のイメージですけれども、教師はとも神聖な地位にいる人物であると考えられています。理想の教師のイメージは、中国語で「克己復礼」といいます。「克己復礼」は「己に克ち礼に復る」ということ、また「内聖外王」は「内には聖人、外に対しては王者としての道徳を必ず持つ人物」と認識されています。「内外」は統一的な一体性を指します。現代の教師のイメージとは異なるものだと私は思います。

これに対し欧米社会の教師のイメージは教僕的です。教僕はギリシア語でパイダゴゴスといいます。いわゆる学識ある奴隷というイメージでした。例えば、プラトンとソクラテス、この師弟は対話という形で真理を得たということになっています。この発想からは、教師と弟子は平等な関係にあるとすることができます。ですから、ルネサンス以降の欧米社会は生徒中心という理念をずっと貫いてきました。ですから、教師は生徒のパートナーという役割を担うことになります。中華圏の儒教の教師のイメージと欧米社会の教師のイメージはまったく違います。

しかし台湾社会では、この2つの教師のイメージを1つにしようという動きがあります。例えばこういう事例があります。1970年代の台湾の教員養成政策は、アメリカのコンピテンシー・ベースの教育理念を導入しました。

当時、教師という職業に必要な能力についての研究が、ある研究会に委託されました。その結果わかったことは、コンピテンシー・ベースの教育は、高度に工学化された教育モデル

であり、行動主義の考え方をういたということでした。

当時、多くの批判的な意見が出されました。その批判を通して、コンピテンシー・ベースというやり方は、工学的に知識を伝授することができても、生徒の態度、観察、判断、意識、想像という側面までは判断するには到らないということが認識されました。

当時、郭為藩氏は次のように批判しました。コンピテンシー・ベースの教育は、技術の伝授を重視するにすぎず、人を育てるという意味では不十分である、と。知識を授けるのは「経師」、人を育てるのは「人師」というふうに例えました。経師は、現代社会に代表される知識を授ける断片主義的な教師のイメージだと思われます。人師は、儒教文化の中の全体論を代表すると思われます。

現代社会の中の教育は断片主義と指摘されていまして、儒教文化の全体論は、現代の教員養成の断片主義に対して一つの補完という役割をしているということが指摘されました。しかし、このような補完という役割は矛盾した言い方だと思います。同じ矛盾が台湾の政策の中にも表れています。

韓愈は『原道』の中で、伝統的な教師のイメージを「道を伝え、業を授け、惑いを解く」ということだと言っています。しかし、「道を伝える」の「道」は、真理や知識を指すわけではないと思います。私は、正しい政治ということの意味していると思います。

ですから、現代社会の中の教師という職業は、高度な分業化の中で知識を授ける、そういう職業だというふうに私は認識しております。

初期の教師の特質論であっても、後期の新自由主義の中の教師のイメージであっても、いづれにしても教師としての最低基準をクリアしなくてはいけないということの意味しています。しかし、伝統的な儒教の教師のイメージは最高基準を表していると思います。最低基準を表すか、最高基準を表すか、これは2つの衝突する概念だと思います。

しかし、台湾の2012年の教育白書では、この2つの概念を1つにしようとしています。白書では人師と経師、両方の概念を強調しました。

白書で示された新しい時代の優れた教師のイメージには4つの目標があります。「師道」「責任」「精緻（まじめ、丁寧ということ）」「永続（やり続ける、努力し続ける、学び続けるということ）」です。この4つが白書の政策目標です。

1つめの「師道」は、「教師の道を伝え、業を授け惑いを解く」という教師の伝統的な役割を表します。白書のなかでは次のように述べられています。「民主的・多元的な社会において、社会変動に従い、経師と人師の品質を身につける良い教師になることを堅持する」。

この説明は、韓愈の説とは無関係だと私は思います。その部分は、教師の生徒に対する思いやりとかケアという部分を強調しています。しかし「道を伝え、業を授け惑いを解く」というイメージの教師は、伝統的な儒教の中で「教師を尊ぶべし」というイメージを伝えようとするものです。これは、教師は多種多様な職業の1つにすぎず、教職をなるべく専門化し、技術化するという現代社会に見られる方向性とはまったく違う方向だと私は思います。

これは、伝統的な教師のイメージと現代社会の教師の専門化のイメージとを混同させるような政策であり、教師のイメージに対する混同を政策として表現している1つの例だと思います。教師はあるべき社会的地位を維持することを希望する一方、教師は現代社会における専門化の役割を果たすという期待もその中に含まれています。

私の結論は次のとおりです。教師は教育の中ではとても重要な役割を果たしていると思います。しかし、異なる社会はそれぞれ異なる文化的な要素により、近代化の過程で教師の役割は調整されなければならないと思います。私は今の台湾の教師の役割というのは、片方は伝統的な儒教の影響を受け、もう片方は現代社会の教師に対する期待の影響も受けていると思います。ですから、教師の役割は台湾社会においては矛盾を多く抱えていると思います。以上、私の報告です。ありがとうございました。

黄 柏叡 (Huang, Bo-Ruey)

中国文化大学教育学院副教授。東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター客員准教授（2017年2月～8月）。教育学博士。専門は、教育哲学、教育社会学、比較教育学。主著・論文に『Foucault 論教育』（中国文化大学華岡出版部、2013年）、「Teacher Professional Development in Taiwan,” in Shen-Keng Yang and Jia-Li Huang (eds.), *Teacher Education in Taiwan*, London: Routledge, 2016, pp. 157–176 など。

【コメント】

日本の教師像／台湾の教師像——「熱血教師」という呪縛

山田 浩之

こんにちは、広島大学の山田浩之です。

黄先生、ご報告をありがとうございました。台湾の教師像について、深く理解できたと思います。教員の地位の問題、出身階層の問題など、私自身、そのような研究をしてきましたので、ぜひ議論したいところですが、本日はあまり時間もありませんので、教師像の変化に焦点を当ててお話ししたいと思います。

さて、黄先生のお話の内容に重ねながら、簡単に自己紹介をさせてください。実は私、こんな本を書いております。タイトルは『マンガが語る教師像——教育社会学が読み解く熱血のゆくえ』です。私の研究としては、中等教員の歴史や教師のライフヒストリー、学生調査など、まじめな研究をしているのですが、どうもこういうマンガの研究の方がうけが良いようです。学生などは、私はマンガの研究ばかりしていると思っているようで、ライフヒストリーの話をする、私がそんな「まじめ」な研究をしているとは思っていませんでしたのでびっくりした、などという感想が返ってくる場合があります。

さて、この本、ソフトな内容かもしれませんが、いたってまじめにマンガに描かれている教師像を研究した本です。その際、キーワードの一つとして用いたのが「熱血教師」という教師像です。

後で詳しく述べますが、「熱血教師」、実はマンガにはほとんど出てきません。テレビドラマの中には頻りに熱血教師が出てきます。ここにあげた青春ドラマシリーズや金八先生、スクールウォーズはその典型ですし、最近のドラマにも熱血教師は頻りに出てきます。

しかし、80年代以降、マンガにはまったくといって良いほど熱血教師は出てきませんし、よく熱血教師と言われる「GTO」や「ごくせん」も、実は原作のマンガでは必ずしも熱血

教師とは言えません。むしろ熱血教師はパロディとして、笑いのネタとして使われています。

ですから、熱血教師とは、上の世代が持つ教師像、若い世代はアンチ熱血教師像を教師の理想と考えていると思っていました。

ところが、最近、こうした私の考え方を打ち砕くようなマンガが出てきました。それが『暗殺教室』です。

『暗殺教室』はご存じでしょうか？

中学校を舞台にしたマンガ、『暗殺教室』（松井優征）の主人公、「殺せんせー」は人間の理解を超えた「謎の生物」です。しかも、このマンガは生徒が担任教師を暗殺することが目的という衝撃的な設定で始まります。

このマンガは椏ヶ丘中学校の底辺クラス、3年E組にとんでもない担任教師が現れるところから始まります。この担任はタコのような触手を持った超生物であり、月を破壊しただけではなく、1年後には地球を破壊するという、想像を超えた存在です。生徒たちは、1年間、暗殺の技術を磨きながら、この担任教師「殺せんせー」を殺さなければなりません。しかし、最高速度マッハ 20 で移動するだけでなく、数多くの特殊能力を持ったこの生物を殺すことは至難の業です。こうして殺せんせーを殺すことを目的に殺せんせーの指導を受けるという生徒たちの奇妙な学校生活が始まります。

この『暗殺教室』は、いくつかの点でこれまでの教師マンガとは大きく異なっています。その一つは勉強が大きなテーマの一つになっていることです。もちろん、「暗殺」が大きなテーマでもあるため、他のマンガと同様の戦闘シーンも少なくありません。しかし、学校内での闘い、つまり、最底辺クラスのE組の生徒たちが、最上位のA組と闘う上でもっとも重視されるのが定期テストです。テストで上位を占めること、さらにA組を抜くことこそが底辺クラスの生徒たちにとってはもっとも重要なこととなります。E組の生徒たちは、殺せんせーの指導のもと、各自の得意分野を磨きながらテストに挑みます。そこでの闘いは自分自身との闘いでもあり、テストを通じて生徒たちは大きく成長していきます。

また、生徒一人ひとりの卒業後の進路について、教師が積極的に関わることも他の教師マンガにはあまり見られません。殺せんせーは、生徒一人ひとりの進路を気にかけて、それぞれの適性に応じた進路を自主的に見つけ出せるよう巧みに誘導します。また、殺せんせーは自分が暗殺された後のことも考えた分厚い資料を生徒一人ひとりのためにマッハ 20 のスピードで作成します。

つまり、『暗殺教室』はある意味、非常に教育的なマンガと言ってよいでしょう。これまであまりマンガで描かれることのなかった教室内外での教育活動がさまざまな形で描かれています。

さらに、教師マンガの中で何よりもこのマンガが異質なのは、殺せんせーが典型的な熱血教師だということです。殺せんせーは生徒に積極的に関与することで、生徒の問題を解決する熱血教師です。

先ほどもお話ししましたように、マンガには熱血教師はまったく出てきませんでした。それは、少年マンガや少女マンガの読者である若い世代にとって、熱血教師は鬱陶しいものでしかなかったからでしょう。マンガにはこうした青少年の教師像を反映することで熱血教師を否定し、新たな別の形の教師像が描かれてきました。その一つが教育には積極的な関心を

示すことがなく、しかも、学校への対抗文化を持った不良教師だったのです。

これが不良教師の例です。1980年代になると現れるようになるのですが、当初は左側のコンボラ先生のように更生して教員になっていました。しかし、80年代の半ばくらいから更生せず、不良のまま教師になるようになります。右側の『はいすくーる仁義』では、私は広島から来ましたが、その広島出身のやくざが、やくざのまま教員になっているという設定になっています。

しかし、2010年代に入ると、冒頭に述べたように『暗殺教室』で熱血教師が主人公になるマンガが出てきます。『暗殺教室』の殺せんせーは、問題児の集まりである3年E組の担任として、生徒一人ひとりと積極的に関わっています。暗殺と関わらせながら学力を向上させ、歪んだ心を矯正し、将来の目標を見い出させています。必要があれば、家庭にまで入りこみ、家族の問題も解決します。おっちょこちょいだったり、ちょっとスケベだったりすることも含めて、かつてのテレビドラマの熱血教師そのままです。

実は同じような熱血教師は『電波教師』（東毅）、これは2011年からですけども、ここでも描かれています。主人公、鏡純一郎はオタクで、やりたいことしかできない、YD病と言われるのですが、そういう病気でニート生活を続けていました。それを見かねた妹に無理矢理教師にさせられますが、鏡は教師として生徒の問題を解決していきます。必ずしも積極的ではありませんが、自分の「やりたいこと」に合致すれば、生徒の問題に情熱的に関わっていきます。この主人公教師、鏡もまた、生徒と積極的に関わる熱血教師です。

このように2010年以後、マンガの中に熱血教師が描かれるようになっていきます。これはマンガ読者層、つまり青少年の理想的教師像が変化し、熱血教師を理想とするようになっていくことを意味しています。

かつての日本では、教師には学校での児童生徒のみならず、地域や家庭に対する啓蒙も期待されていました。70年代までの教師は、放課後に家庭をまわり、また、地域の人たちとも積極的にコミュニケーションをとってきました。熱血教師は、こうしたかつての日本の教師の姿を原型にしているのでしょう。

しかし、80年頃から、こうした家庭や地域での仕事は困難になってきました。家庭の中に教師が入っていくことはプライバシーを理由に拒絶されるようになりました。

家庭訪問が良い例です。昔の先生は家庭でケーキを食べたり晩御飯を食べることが少なくありませんでした。私が小学生の時の先生は、部屋の中まであがってきて、私の勉強机を見て、勉強できる環境かどうかをチェックし、机に貼ってある怪獣のシールとか、当時流行っていたのですが、それを張っていると全部剥がすように指導しました。今はそんなプライベートなことにかかわることはできないでしょう。

児童生徒も教師とは距離をとり、受け入れないようになってきました。多忙な教師にとっても、児童生徒と十分に関わる時間が無くなったのかもしれない。

しかし、社会からは、依然として熱血教師であることが期待されています。実情にはあわないにもかかわらず、教師は熱血教師として振る舞わなければなりません。教師にとっては無理な仕事を押しつけられたこととなります。このような教師の現実と期待との乖離が、80年頃からの教師批判を生み出してきたのです。

現在、こうした状況はさらに難しいものになっています。つまり、マンガに熱血教師が登場するように、児童生徒もまた現実の教師に熱血教師を求めるようになってきました。しか

し、現実の教師は殺せんせーのようにマッハ 20 で動くことは出来ず、児童生徒の問題を解決することは容易ではありません。また、児童生徒や家庭とマンガのような関わりを持つことも依然として困難なままです。こうして熱血教師の呪縛は、さらに教師を苦しめることになっています。

あるべき教師の姿は多様であり、さまざまな教師が存在するはずですが、熱血教師は決して唯一の理想ではありません。教師とは何か、いかなる職業でどのような仕事をするのか。今こそ、教師という職業が問い直されなければならないのでしょうか。

さて、こうした日本の状況を踏まえて、黄先生に 3 点質問したいと思います。

まず、台湾の人師と言われたもの、あるいは儒教的な教師像です。これが日本の熱血教師、あるいは献身的な教師像にあたるものではないかと思えます。日本の熱血教師像も、同じ起源を持っているのかもしれませんが。日本では、こうした熱血教師像、あるいは献身的教師像をめぐるストーリーがある種の呪縛にもなって、教師に長時間労働や一般的に考えられる職務以上の仕事を強いていると私は考えています。台湾でも同様のことがあるのでしょうか。

次に、経師と人師は、専門職と教育愛による教師ということですが、台湾の中で実際にはどのように認識されているのでしょうか。台湾での具体的な例というのはどのようなものなのか、ということがもしあれば、教えていただきたいと思えます。日本では専門職としての教師は生徒との関係はドライ、つまり、職業として、仕事としての接触と捉えられてきた感があります。台湾でもお話にありましたように、実際にはこの両者は対立関係にあるのでしょうか。具体的にどのような点で対立しているのか、また、両者を兼ね備えた、統合した理想の教師像といったものはありえるのでしょうか。

最後に、これは個人的な興味なので簡単にしますが、台湾で熱血教師はどのように受容されているのか、がもしあれば教えていただきたいと思えます。台湾では熱血教師のことが「麻辣教師」というふうには、麻婆豆腐と同じようなかんじで翻訳されているようですが、もし熱血教師像のようなものが台湾でもあれば教えてください。

どうもありがとうございました。長くなってしまい申し訳ありませんでした。これで終わりたいと思えます。

山田 浩之

広島大学大学院教育学研究科教授。博士（教育学）。専門は、教育社会学。主著に『マンガが語る教師像——教育社会学が読み解く熱血のゆくえ』（昭和堂、2004 年）など。

【コメントへの回答】

黄：山田先生、ありがとうございました。3 つの質問に、努力してお答えしようと思えます。

まず 2 番目の質問についてです。「経師」と「人師」という概念は永遠に理想の教師のイメージだと私は思いますが、多分、実現できないと思えます。これらの概念は、時々、教師の不十分さを批判するときに使われます。台湾の今の教師たちは、人師というイメージから距離が出てきたように思われます。

これと関連して 1 つめの質問に戻りますが、台湾の教師たちも、それほどたくさんの時間

あるいは自分の力を生徒に注ぐということはあまりないと思います。多くの教師は、自分の仕事を終えたらすぐ家に帰るといった状況です。

しかし先ほどご紹介しましたように、初期の台湾の教師の多くは、社会の底辺から這い上がった人たちです。これらの教師は、生徒の家庭背景、特に家庭にいろいろなトラブルが起きることを理解できる人たちでした。教育愛を持つ教師という言い方より、底辺の家庭の出身の子どもたちの苦しみあるいは悩みを理解できる、という言い方が当てはまるように思います。

それでは3番目の質問に入ります。『GTO』という漫画は、台湾では20年ほど前の作品です。当時私は学生でした。この漫画が何を表そうとしているのか私には全くわかりませんでした。しかし今、山田先生のご紹介を受けまして、この漫画が何を表そうとしているのか理解することができました。それは2点にまとめることができます。

1点目は、生徒たちの問題は学習に関わるものだけではなくなくなったということです。それはもっと複雑な、社会的な問題になったのだと思われます。教師の問題解決能力というものは、生徒の学習上の問題を解決する能力だけではなく、社会全体に関する能力も備えなければならなくなったということです。

2点目は、現代の生徒たちの問題を解決できる教師は、とてもレベルの高い教師だと思われれます。かつての熱血教師であっても、現在の「殺せんせー」であっても、それは一般の人が想定できない相当高いレベルの教師です。これらの教師の持つ能力は、一般の人には、または伝統的教師たちには、到底想定できないものだと考えられます。逆に、このことは、現代の問題に対応できない教師たちの無力さを示しているとも言えるのではないのでしょうか。

ある意味では、『GTO』の麻辣教師、あるいは『暗殺教室』の中の教師は、理想の教師のイメージにすぎないのではないかと私は思います。

以上が私の回答です。ありがとうございました。